

川端康成における「魔界」思想

——「仏界易入 魔界難入」を手掛かりとして——

黒崎峰孝

I

「仏界易入 魔界難入⁽¹⁾」という言葉は一休の言葉とされているが、川端康成はこの言葉に非常なる関心を持っていたように、いくつかの作品の中にも使用している。「仏界易入 魔界難入」の意味するところは、アイロニーとして受け取れば、一見たやすく理解出来そうにも思えるが、一歩深く考えてみると、短い言葉ながらなかなか深い意味合いのある言葉である。一様ならぬ解釈が可能であり、一言では片付けられない奥行を持った言葉のようである。本論は、川端康成とこの言葉の関係、つまり、川端がこの「仏界易入 魔界難入」の言葉をどう理解し、どう受け止め、さらにどう己れの内面に肉化して行ったか、川端にとって「仏界易入 魔界難入」とは何であったのかを探るのが目

的である。そして、その手掛かりとなるのが、「舞姫」、「みづみ」、「眠れる美女」、「たんぽぽ」などの作品群である。これらの作品での引用のされ方、また展開のされ方をたどってゆくことによって、川端康成における「仏界易入 魔界難入」が如何なるものであったか、かなり明確に浮びあがって来ると思われる。この言葉が使用されるのは戦後であるところから、戦後の川端を理解するには決して見落せないものである。そればかりか、この言葉と川端の関係を究明することは、川端文学、川端康成という人の側面を理解する上でのひとつの鍵となることを信ずるものである。

「仏界易入 魔界難入」の言葉は一応思想を表現していると考えられるので「魔界」思想と仮名し、以下、川端康成における「魔界」思想という論題に沿って、作品のひとつ

つひとつを追いながら論じて行ってみよう。

II

川端が作品の中でこの「仏界易人 魔界難入」という言葉が一番最初に用いたのは、昭和二十五年十二月十二日から、翌昭和二十六年三月三十一日まで、朝日新聞に連載された新聞小説「舞姫」の中においてである。

「舞姫」は、バレリーナである波子とその娘品子、そして波子の夫矢木と品子の弟高男、つまり、矢木家を中心とし、そこに波子の昔の恋人竹原を加えてストーリーが展開される物語である。矢木家の者は、一応家族を構成しながらも温かい心の交流は薄く、品子は波子側、高男は矢木側というような派閥的分裂さえ、この親子間には漂っている。矢木は妻である波子の、もと家庭教師であり、臆病な非戦論者、逃避的な古典愛好者であり、妻にたかって生きて来た男である。妻に内緒で貯金をしたり、波子名義の家をこっそり自分の名義にすり換えてしまうような男である。そういう矢木をもちろん波子は愛せようはずは無く、竹原との密会を重ね、竹原のもとへ突っ走ろうとするが、矢木の底意地悪く不透明な呪縛の前に、その想いは具現化されない。また竹原も力づくで波子を奪い去ることの出来ない無力な男である。思えば竹原ばかりでなく、矢木も波子も、さら

に品子も高男も、目の前の運命を自分の力ではどうすることも出来ない、無力で孤独な人間達なのである。このような不協和音を奏でながら、その結末を見ることなく「舞姫」は未完のままに終わっている。

この未完作品「舞姫」の重要なテーマが、「仏界易人 魔界難入」で、「仏界と魔界」という独立した章さえ設けられている。この中で川端は初めてこの言葉を使っているのである。「仏界易人 魔界難入」なる一行物の掛軸をめぐる、国文学者である矢木と品子の会話の場面が次のように描かれている。

品子が父の部屋へはいつて行くと、矢木はゐなくて、見なれない一行物が、床にかかつてゐた。

「仏界、入り易く、魔界、入り難し。」

と、読むのであらうか。

近づいて、印を見ると、一休であつた。

「一休和尚……？」

品子は少し親しみを感じて、

「仏界は入り易く、魔界は入り難し。」

と、こんどは、声を出して読んだ。

禅僧の言葉の意味は、よくわからないが、仏界には、入りやすく、魔界には、入り難いといふのは、逆のや

うだ。しかし、さう書かれた文字を見て、自分の声で、さう言ってみると、品子もなにか、はつとした。

人のゐない部屋に、その言葉がゐるやうだ。床の間から、一休の大字が、生きた目でにらんでゐるやうだ。

ここで引用した部分が、「舞姫」の中で一番最初に「仏界易入 魔界難入」の言葉を用いた部分であると同時に、川端が小説の中でこの言葉を用いた最初でもある。品子がこの文字に初めて接し、自分の声で口ずさんで「はつとし、「人のゐない部屋に、その言葉がゐるやうだ。床の間から、一休の大字が、生きた目で、にらんでゐるやうだ。」とする驚きは、川端が初めてこの言葉に接した時の驚きでもあつたらう。この一行物の文字は、「はじめの『仏』といふ字は、つつしんだ真書で書いてあるが、『魔』の字に来ると、みだれた行書になつていて、どことなく『魔』を感じさせるようなものだった。品子は父の部屋を出てから、「仏界は、入るに易く、魔界は、入るに難し。」と、もう一度つぶやいてみるが、この言葉が、「父の心と、なにかつながりがあるの」かということも、また言葉そのものの意味も、いろいろに思えて、たしかにはとらえられないのだった。

おそらく川端は、「舞姫」執筆の少し前に、この「仏界

易入 魔界難入」の書かれた一行物をどこかで手に入れ、そして、この言葉に強く惹かれ、この言葉の意味するところをテーマとすべく、小説「舞姫」の執筆に取りかかると、推測される。それは先程述べた、作品中の品子の驚きを描いた部分から察しても充分考えられることである。しかし、この作品が未完に終わっている如くに、川端はこの言葉を「舞姫」の中ではまだ自分のものとはしていないように思えてならない。その様子は、次の部分の矢木と品子の会話からも窺える。この部分は、「舞姫」執筆期に、「仏界易入 魔界難入」を川端がどう解釈していたかを知る重要な手掛かりになると思われるので、少し長い引用になるが、注目してみたい。

「お父さま。その一休の、仏界、魔界は、どういふ意味ですか？」

「これか……？ おもしろい言葉だね。」

と、矢木は静かに、床の墨跡を見た。

「お父さまのおるすに、品子ひとりで、ながめてゐると、気味が悪くなつたわ。」

「ふうむ……？ どうして？」

「仏界、入り易く、魔界、入り難し、と読むんですの？」

魔界つて、人間の世界のこと……？」

「人間の世界……？ 魔界がね？」

矢木は意外なやうに、聞きかへしたが、

「さうかもしれないね。それでもいいさ。」

「人間らしく生きるのが、どうして魔界ですか？」

「人間らしくと言ふが、人間なんて、どこにゐる？ 魔

ものばかりかもしれない。」

「さう思つて、お父さまは、この墨跡を見てらつしやるの？」

「まさか……。ここに書いてある、魔界は、やはり魔界なんだらう。おそろしい世界だ。仏界よりも、入り難しと言ふんだからね。」

「お父さまは、おはいりになりたいの？」

「魔界にはいりたいかと、ぼくに聞くのかね。どういふ意味のおたづねだ。」

矢木は円満な顔で、柔和にほほえんだ。

「お母さんは、仏界にはいると、品子がきめてゐるのなら、ぼくは魔界でもいいが……。」

「あら、さうぢやないんです。」

「仏界、入り易く、魔界、入り難し、といふ言葉は、善人成仏す、いはんや悪人をや、といふ言葉を思い出させる。しかし、ちがふやうだ。一休の言葉は、センチメンタリズムを、しりぞけたのぢやないのか。お母さんや品

子のやうな人の、センチメンタリズムをね……。日本仏教の感傷や、抒情をね……。きびしい戦ひの言葉かもしれない。(略)」

この二人の会話には、何か禅問答を思わせるものがある。品子が疑問を持つのは当然であるが、掛軸を手に入れた張本人の矢木にも疑問はぬぐい去れないやうで、確たる解答は示していない。最後の部分の、「一休の言葉は、センチメンタリズムを、しりぞけたのぢやないのか。お母さんや品子のやうな人の、センチメンタリズムをね……。日本仏教の感傷や、抒情をね……。きびしい戦ひの言葉かもしれない。」とする中に、かろつじてその解答らしきものが語られ、そしてそれは、この時期における川端の、「仏界易入魔界難入」に対する考えでもあろうが、これとても心の底からの確信ある言葉とは受け取れないのである。むしろ、あれやこれやと思ひ迷つている形跡の方が著しく感じられる。矢木と品子のこのやうな会話は、いわば川端自身の内面の自己問答と言つてよいだろう。

結局、「舞姫」においては、矢木と品子の会話から示されるやうに川端は自己問答の域を抜け切れなかつたやうに思えてならない。そして、そのことが作品「舞姫」を未完にする原因、結果となつたとは断言出来ないまでも、かな

り大きく作用していると私は考える。もう一步「仏界易入 魔界難入」の意味するところが川端の内面で肉化され、核心となっていれば、波子を竹原との不倫の恋に突っ走らせることも出来たであろうし、矢木にもう少し強いキャラクターを与えることも可能であったように思えるのだ。矢木も波子も竹原も「魔界」にははまらないまま終わってしまったのである。

「仏界易入 魔界難入」が川端の内面でもう一步深化、肉化されるには、次の「みづうみ」まで待たなければならなかったようだ。

III

昭和二十九年の一月号から十二月号までの「新潮」に発表された「みづうみ」になると、「仏界易入 魔界難入」の「魔界」思想は、川端の内部で相当に深化、肉化された痕跡が見え、作品世界そのものが「魔界」というひとつの小宇宙を形づくっているような観を呈して来る。前述の「舞姫」の時のように「仏界易入 魔界難入」の八文字を引用している部分は一箇所も無く、また、意味をあれこれ考えている部分の記述もまったく無い。徹底されない規則や道徳ほどやかましく言われるが如くに、「舞姫」の中では数多く用いられていた八文字も、この「みづうみ」にな

ると、用いられているのは「魔界」という二文字だけで、それも次の二箇所だけでしか使われていない。

① 銀平があの子のあとをつけたのには、あの子にも銀平に後をつけられるものがあつたのだ。いはば一つの同じ魔界の住人だつたのだらう。

② 「人間のなかに人とちがつた魔族といふやうなものがあつて、別の魔界といふやうなものがあるかもしれませぬわ。」

そして、①においては「魔界の住人」という言葉が使われているように、この作品の主人公桃井銀平は、外側から「魔界」を眺めているのではなく、「魔界」の中にはいる人間、即ち「魔界の住人」なのである。「舞姫」の波子は竹原との不倫の恋に突っ走るまで描かれなかった。だが、教え子玉木久子との不倫の恋に陥つた「みづうみ」の銀平は、学校を追われるとともに実生活をも捨て去つた。それからの銀平は、翻訳や代書というような不安定な仕事でわずかな糧を得ながら、美しく若い女の後ばかりを追いまわすようになる。もともと銀平には、こういう奇癖があり、玉木久子とのことも、銀平が久子の後をつけたことから端を発しているのであつた。しかし、銀平は女の後をつけて

どうかしようとするのでは無い。ただ後をつけて、さ迷い歩くだけなのである。その理由らしきものを、銀平はトルコ風呂の湯女にこう語る。

「妙なことを言ふやうだが、ほんたうだよ。君はおぼえがないかね。ゆきずりの人にゆきずりに別れてしまつて、ああ惜しいといふ……。僕にはよくある。なんて好もしい人だらう。なんてきれいな女だらう、こんなに心ひかれる人はこの世に二人とみないだらう、さういふ人に道ですれちがつたり、劇場で近くの席に座り合はせたり、音楽会を出る階段をならんでおりたり、そのまま別れるともう一生に二度と見かけることも出来ないんだ。かと言つて、知らない人を呼びとめることも話しかけることも出来ない。人生つてこんなものか。さういふ時、僕は死ぬほどかなしくなつて、ぼうつと気が遠くなつてしまふんだ。この世の果てまで後をつけてゆきたいが、さうも出来ない。この世の果てまで後をつけるといふと、その人を殺してしまふしかないんだからね。」

ここで語られているように、銀平には銀平の美学がある。そしてこれは川端美学のひとつと言えようが、「この世の果てまで後をつけてゆきたい」という衝動に従つて、銀平

はただひたすらに女の後をつけてゆく。女の美しさにだけひかれて後をつけてゆくのである。思えばまことに奇妙な行動と言わざるを得ない。しかしこの行為そのものの中には、既に「魔界の住人」としての行為が含まれていると言える。行き着く先が、「この世の果てまで後をつけるといふと、その人を殺してしまふしかない」というのならそこはさらに深い「魔界」の深淵でこそあれ、決して「仏界」などでは無いのだから。

銀平の足は猿のように醜い。その「醜悪な足が美にあこがれて哀泣し、美女を追うのは天の摂理」であるかのように、銀平の行動は果てしなく続いてゆく。時には溝に隠れて女の来るのを待ちぶせるということまでやってのける。銀平は、恥も外聞も、実生活の幸福をも捨てて、「僕は世の底へ落ちてゆくよ。」と語るが如く、「魔界」に住み、「魔界」を歩き、「魔界」の人間たらんとしているのである。銀平のこのような行為と言葉の中には、一見、敗北者、現実逃避者の面影が漂っているようにも見える。しかし、実生活の平安を捨て、進んで「魔界の住人」たらんとすることは、「センチメンタリズム」も「感傷」も「抒情」も退けなければ出来ないことであり、単なる弱者の生き方というとは出来ないうだらう。むしろ、誰も望まない、誰も真似られないひとつの反逆的生き方とは言えないだらうか。ひたすらに

美を求め、美の追求の為なら実生活も平凡な幸福も抛つという作者の内に秘められた信念がこの銀平というフィルターを通して浮び上って来るのである。銀平は屈折された川端の化身であり、「仏界易入 魔界難入」の「魔界」思想を川端は銀平に託してみごとに示したと言えるだろう。

「みづうみ」の銀平は、「美」の探求者川端康成の最も深い意識——「魔界」という、場合によっては作家としての存在そのものを脅かすかも知れぬ危険にみちた世界に住みつけようとする意識——をそのまま分ちもった、悪魔的な美を探求する実践者なのである。この意味で銀平は、それまでの川端作品中、最も作者に近い存在、というよりも、川端康成自身なのである。（「川端康成『みづうみ』私論」昭和48・9「函」と、森本穂氏も銀平と川端の重なり合いを指摘している。銀平の不可解行為を川端自身の視点に立って描いたと思われる「みづうみ」をみると、川端康成における「魔界」思想は、「仏界易入 魔界難入」の言葉こそ用いられてはいないが、川端の内面で充分に肉化され、かつ表現されたと言えるのではなからうか。

IV

「みづうみ」によって深化、肉化された「魔界」思想は、「眠れる美女」（昭和35・1―36・11「新潮」）になると一

層深まりを見せている。というよりも爛熟の観が著しく窺われると言った方が適切かも知れない。この作品も「みづうみ」と同じく、「仏界易入 魔界難入」の言葉は一箇所も使われていないが、作品世界を形づくっているものはやはり一種の「魔界」と言えるのである。

波の音が、高い崖を打つように荒く聞え、「深紅のびろうどのかあてん」に象徴される館は、老人達を「魔界」へいざないゆく館なのである。作品の展開はこの極めて閉塞状況のもとにある館の内部だけに限られ、眠れる美女を弄ぶ老人達は、訪れつつある死の足音に耳を傾けながら、一夜の逸楽に身を任せ、過ぎ去りし昔日の思い出を回想する。そこにはもはや何の発展性も救いも無い。前後不覚に眠らされた眠れる美女との精神的交流も、互いの感応を前提とする「愛」の浸潤も許されてはいない。「女の子を起こそうとなさらないで下さいませよ。どんなに起こそうとなさっても、決して目をさしませんから……。女の子は深く眠っていて、なんにも知らないんですわ。」と、宿の女の語るところのタブーが、この作品の官能に抑制を与える鍵となつている。江口老人は男としての機能を失っていないにもかかわらず、このきまりを最後まで守るのである。「起きないの？ 起きないの？」と、娘の肩をゆさぶり、頭を持ちあげようと、娘はあい変らず眠り続け、江口老人

の存在はみじんも通じないのであるが、しかしまた、一方的な交渉であるがゆえに、「秘仏と寝るようだ。」と語る木賀老人の言葉に示されるような無気味な密室のエロチシズムと安堵感も逆に存在することになる。三島由紀夫はこの「眠れる美女」を、「形式的完成美を保ちつつ、熟れすぎた果実の腐臭に似た芳香を放つデカダンス文学の逸品である。」(新潮文庫「眠れる美女」解説)と評し、また、作品世界を「絶対無救済の世界」としているが、親鸞流の解釈をするとこの絶対無救済こそ「救い」なのかも知れない。

「眠れる美女」が巢なる官能小説に終わっていないのは、官能の対象である娘はどこまでも無言であり、老人達が何を語りかけようと、どんな願いをかけようと返事をする事のない娘の「秘仏」的描かれ方があったからとも言えよう。この一線と、江口老人の一線が破れると、「眠れる美女」の世界は、「熟れすぎた果実の腐臭に似た芳香」も放たなくなり、「形式的完成美」も崩れ、奇妙で珍腐な作品となったことだろう。老人と眠れる美女とが、本質的には没交渉であるという無救済こそが、作品「眠れる美女」の救いであり、「デカダンス文学の逸品」たる由縁と言えるのである。先程も述べたが、「眠れる美女」では、「みづうみ」の時と同じように、「仏界易入 魔界難入」という言葉はまったく使われておらず、「魔界」という言葉だけが、やはり

次に引用する二箇所を用いられている。

①男を「魔界」にいざなひゆくのは女体のやうである。

②「老いばれの死はみにくいね。まあ、幸福な往生に近いかもしれないが……。いやいや、きつとその老人は魔界に落ちてゐるよ。」

「みづうみ」の銀平が、美しい女の後をつけるように、江口老人も美しい眠れる美女を弄ぶ。「肉体の一部の醜が美にあくがれて哀泣するのだらうか。醜悪な足が美女を追ふのは天の摂理だらうか。」とする「みづうみ」での表現の延長線上に浮ぶのが、①の「男を『魔界』にいざなひゆくのは女体のやうである。」という「眠れる美女」での表現であろう。銀平のような足の醜さは無いが、「眠れる美女」では老いの醜さがある。そして、「みづうみ」では描かなかつた「死」というものが、この作品ではさらりと書き流されているのである。ひとつは老人福良専務の死であり、もうひとつは、源氏物語の夕顔の死を思わせるような、黒い娘の死がそれである。二人とも他者の手によって殺されたのではなく、変死と言えらる突然の死なのだが、「この世の果てまで後をつけるといふと、その人を殺してしまふしかない」とした、「みづうみ」での銀平の言葉は、幾分曲折

されてはいるものの、「眠れる美女」に至ってはとうとう実現されたと言えるだろう。ここまで来ると、川端康成における「魔界」思想も爛熟を迎え、遂に来る所まで来たという感を禁じ得ないのである。「眠れる美女」はその頂点に立つ作品のような気がする。

V

成住壊空が森羅万象を貫く法則であるかのように、「舞姫」によって導入され、「みづうみ」おいて深化、肉化され、「眠れる美女」に至って爛熟の様相を見せた川端の「魔界」思想も、「たんぽぽ」までたどりつくともはや崩壊の観を漂わせている。

「たんぽぽ」は、昭和三十九年六月から、昭和四十三年十月まで、「新潮」に断続掲載されたものであるが、それまでの川端には見られなかった、延々と長い会話ばかりの続々、明らかに失敗作と見られる作品である。「山の音」等に見られる余情のこもった文章はどこにも見あたらず、極めて饒舌となつてゐるばかりか、何を言わんとしているのかさえはつきりしない。そして、ノーベル賞受賞騒ぎも加わつてか、この作品もまた未完に終つてゐる。

この作品は、人体欠視症という、人の身体が時々見えなくなる病を持つ木崎稲子が、生田にある気違い病院に入院

する。そして、稲子の入院に同行した稲子の母と、稲子の恋人久野との、見送りの帰り道にかわす会話から、物語の発端が始まる。この二人の会話というものが、「たんぽぽ」の大部分を占め、その中で稲子の病状のこと、子供の頃のこと、幼くして死んだ父親のこと、また、気違い病院で見た西山老人のことなどが語られるわけである。稲子の病状が一番最初にあらわれたのは、高校二年の卓球の試合中であった。試合での打ち合いの最中に、突然ピンポン球が見えなくなつてしまつたのである。ほかのものは見えているのに、ピンポン球だけが見えなくなつたのである。稲子の母は気のせいだと、稲子をなだめたが、それはやはり人体欠視症の初期症状なのであった。そして、その症状はやがて進み、人の身体が見えなくなるといふところまでゆくのである。稲子と久野は恋人となつた。その久野との愛の時に、時々久野の肩や口が見えなくなるといふ事態が起り、久野は反対したが、稲子の母は決局稲子を、生田の気違い病院へいれることにしたのだつた。「たんぽぽ」の最後の部分は、久野が稲子を見送りに行つたその夜、稲子の母と泊りの宿でも長い話をかわすが、その会話を終え、一人床に就くと、稲子が「ああ、久野さんが見えない。見えなくなつたわ。」と言つた過去のことを想ひ起し、その時の様子を描く途中で中断されている。

ストーリーの展開も、人体欠視症などというこの世にあるのか無いかわからないような病名の設定も奇妙で、作品の価値としてはあまり注目するには及ばないと思うが、作中人物の一人として注目したい人物がひとりいる。それは気違い病院にいる西山老人の存在である。

たとへば、病院の主のやうな西山老人は、本堂の畳に紙をひろげて大きい字を、よく書いてゐる。白い日本紙や唐紙が、この老狂人の手にさうはいらないので、古新聞に書いてゐることが多い。

(仏界易入 魔界難入) 書く字はたいいこの八字である。西山老人自身はこれを、「仏界、入りやすく、魔界、入りがたし。」と読んでゐる。老人は白内障で目が霞んでゐるが、その書は力がある。俗気、匠気がない。しかし、狂気はあるか。騒がしい字ではなく、気ちがひらしい字でもないが、よく見てゐると、狂気あるひは魔気がひそんでゐさうには思へる。西山老人は人生のある時に、魔界にはいらうとつとめて、魔界にはいらがたかつた、その痛恨が、狂つた老後の字にもあらはれるのかもしれない。西山老人の「魔界」とはどのやうなものであつたか、とにかく、人生のある時にその「魔界」にはいらうとしたねがひは、彼を狂はせたほどの痛ましさを

ではあつたのだらう。西山老人は気ちがひ病院を魔界だなどと考へてゐない。魔界にようはいれなかつた、人たちの避難所、休息所といふほどにも考へてゐないだらう。

ここに描かれている西山老人も、「みづうみ」の桃井銀平の時と同じように、やはり川端の化身と言えるようである。雑誌の挿入写真等に、川端が「仏界易入 魔界難入」の文字を揮毫している姿や、書かれた文字が出てゐるが、この「たんぼぼ」を読んで、写真の川端と照らし合せてみると、あまりにも一致するので無気味な思いがする。白内障であるところなども非常に良く似ている。

この西山老人が、人生のある時に、「魔界」にはいらうとつとめたがはいりがたく、その願いは彼を狂わせたあげく、気違い病院の中で「仏界易入 魔界難入」の文字ばかりを書いてゐるといふ設定、また、「たんぼぼ」全編の作品形態から見ても、川端の「魔界」思想も、もはやこの時期においては、終焉を告げているとは考へられないだらうか。川端が「魔界」思想を、己れの内部にしっかりと保ち続けているのなら、このやうな西山老人の設定も作品形態も、あり得なかつたと思われるのである。次に引用する部分からも、さらにそのことは裏付けられるように思う。

「気がひたちも西山老人をはばかるけはひがあつて、話しかける患者はすくない。もし木崎稲子が老人に近づくとなると、稲子は声がきれいだから、老人をよろこばせるだらうか。しかし、をかしながらおこるかもしれない。人体欠視症の稲子は、西山老人のからだは全く見えなくて、ただ、筆が動いて（仏界易入魔界難入）と字を書くのが見える。そんなことがないとはかぎらぬ。そして、稲子に老人の姿が見えないで、筆と字とだけが見えると、老人にわかれば、あるひは西山老人は、今こそ自分が魔界にはいれたと、欣喜勇躍するのではないだらうか。いや、西山老人の「魔界」とは、そんなまやさしいものでないかもしれない。しかし、精神の老衰について、西山老人の魔界も老衰してゐるかもしれない。若い娘の稲子によつて、たわいなく魔界にみちびかれてゆくかもしれない。もうそれは、そこにはいりがたくて気が狂ふといふほどの魔界ではないかもしれない。」

「西山老人のからだは全く見えなくて、ただ、筆が動いて（仏界易入魔界難入）と字を書くのが見える。」という表現などは、文字のみあつて内実無しという感がするし、「精神の老衰につれて、西山老人の魔界も老衰してゐるの

かもしれない。」とするのは、偽らざる川端の本音のような気がしてならないのだ。「舞姫」、「みづうみ」、「眠れる美女」と、段階を追うごとに深まりを見せて来たかに思われる「魔界」思想も、「たんぼぼ」に及んでは、その形骸化された文字だけが残されて、肉となり、血となった部分はどこにも見あたらないのである。「仏界易入 魔界難入」の響きは、祇園精舎の鐘の声のように、ただ空しく響くだけである。

川嶋至氏は、この作品を通して、『たんぼぼ』を書く川端氏のうちに、芸術至上の立場に対する懐疑があつたのではないかということである。芸術の美神の前にいっさいを捧げ、そのために現実から遊離するのをもまたやむを得ないとするのが、川端氏のつらぬいてきた道であつた。（中略）だがその立場が、晩年になってぐらつくようなことがあつたのではないか。（『美神の反逆——『たんぼぼ』昭和47・7『新潮』）ということを述べているが、氏の言う「芸術至上の立場に対する懐疑」、「ぐらつき」を、私は川端の内部における「魔界」思想の崩壊と捉えたいのだ。戦後の川端にとって、「魔界」思想は非常に重要な思想であり、創作の原動力、核となつて来たと考えられる。しかし、その「魔界」思想も、川端は遂に最後まで持ち続けることは出来なかつた。そういう現われが、「たんぼぼ」における西山老

人のような形となって表現されたように思えるのである。

VI

以上、作品に則して、川端康成における「魔界」思想とは如何なるものであったかを見て来たわけであるが、最後に、ノーベル賞受賞記念講演「美しい日本の私——その序説——」の中で、「仏界易入 魔界難入」について語られているところを引用して、そのまとめを試みたい。川端は次のように語っている。

私も一休の書を二幅所蔵してゐます。その一幅は、「仏界入り易く、魔界入り難し。」と一行書きです。私はこの言葉に惹かれますから、自分でもよくこの言葉を揮毫します。意味はいろいろに読まれ、またむづかしく考へれば限りがないでせうが「仏界入り易し」につづけて「魔界入り難し」と言ひ加へた、その禅の一休が私の胸に来ます。究極は真・善・美を目ざす芸術家にも「魔界入り難し」の願ひ、恐れ、祈りに通ふ思ひが、表にあらはれ、あるひは裏にひそむのは、運命の必然であります。「魔界」なくして「仏界」はありません。そして「魔界」に入る方がむづかしいのです。心弱くてできることではありません。

この「美しい日本の私——その序説——」に語られるところ、今まで見て来た作品への投影のされ方を考え合わせてみると、川端における「魔界」思想は、いつそう明らかになるように思われる。

「私も一休の書を二幅所蔵してゐます。その一幅は、『仏界入り易く、魔界入り難し。』と一行書きです。」と、語るところからも推察されるが、川端は「舞姫」の執筆に取りかかる少し前に、一休の印のある「仏界易入 魔界難入」の書を、どこかで手に入れたのだろう。そしてこの言葉に強く惹かれ、創作の原動力としながら、川端の内面においては次第に深化して行つた。それは、「究極は真・善・美を目ざす芸術家にも、『魔界入り難し』の願ひ、恐れ、祈りに通ふ思ひが、表にあらはれ、あるひは裏にひそむのは、運命の必然であります。『魔界』なくして『仏界』はありません。そして『魔界』に入る方がむづかしいのです。心弱くてできることではありません。」とするように、芸術家としての川端にとつては、創作信条のようなものになつていたと考えられる。己れの現世的な幸福など一切捨てて、芸術の追求の為なら地獄であろうと魔界であろうと、どこまでものめり込んでゆく。魔界には感傷も抒情も救いも無いかも知れない。しかしそこにはいつてゆかなければ

つかむことの出来ない深い芸術の境界もあろうし、そこにはいったものだけしか垣間見ることの出来ない何もものかも存在しよう。「仏界」という世界が、悩みも苦しみも無い幸福な世界であるとするなら、「仏界」ばかりを指向していれば、人間の実存などつかめようはずはない。「魔界」というカオスの世界、貪瞋癡の煩惱がはびこり、愛欲の火炎渦巻く無明の世界、それを凝視め、そこに入ってゆかなければ、如何なる綺麗ごとを言ったところで、所詮それは上べだけのものである。より深く、より本質的なものをつかむには、「仏界」から「魔界」を見ていたのでは駄目なのである。「魔界」の深淵にどっぷりつかり、「魔界の住人」となって、「魔界」の真っ只中からつかみ取ったものこそ真実のものであり、それこそ真の「仏界」と言える。「魔界」なくして「仏界」はありません。」とした川端の真意はそこに通じようし、川端における「仏界易入 魔界難入」の受け止め方、指向の仕方、以上に述べたようなものではなかっただろうか。そして、川端はこの思想の展開として、「舞姫」を創作し、「みづうみ」を創作し、「眠れる美女」を創作した。また、実生活においても展開するよう心掛けたかも知れない。しかし最晩年に至るまで、川端はこの「魔界」思想を己れの内部に保持し、「魔界」との戦いに勝つことが出来たであろうか。否である。「たんぼぼ」という

作品形態、またそこに描かれた西山老人の姿から想像しても、否と言わざるを得ないのである。川端の晩年の奇行、奇言などからみても、明らかに「魔界」思想との戦いに敗れたと言えるし、「魔界」思想を保ち続けることは出来なかったと言えるのである。「仏界易入 魔界難入」は、川端にとつて、その芸術創作の原動力として最も大きく作用し、また、実生活上の底流としても作用を及ぼしたことだろう。だが、この思想に徹し切れることは、川端には少し荷が重すぎたようだ。やはり「魔界」は入り難かったのであろうか。

「仏界易入 魔界難入」とは、考えれば考える程、無気味で不思議な力を持つ言葉である。川端だけでなく、誰人として、この思想に徹し切れることなど至難の業であろう。しかし川端はこの思想に挑戦した。わずか八文字の中に深い哲理を語り、一人の芸術家を揺り動かした一休の凄さもさることながら、敗れたとは言え、その哲理に挑戦し、創作の原動力とした川端の芸術家魂にも目を見張るものがある。川端康成は多様な作家で、戦後の川端を語るだけでも一様にはゆかない。しかし、少なくとも、戦後の川端を語るにあたって、この「仏界易入 魔界難入」だけは抜きにして考えられないように思えるのだ。それ程まで、この言葉と川端との間には深い関わりがあったものと私は受け止めている。

注

(1) 一休の言葉であることはほぼ確実であろうが、確かな証拠は無い。「狂雲集」、「一休骸骨」、「山林風月集」、「自戒集」等を散見してみたが、「仏界易入 魔界難入」の文字は見あたらない。ただ、「狂雲集」には、「仏界退身魔界場」281、「仏界伎窮魔界収」547、「仏界休時魔界収」692、等のやや近い表現は見受けられる。

(2) 選挙活動や、テレビのCM出演など、孤独を好む川端にしては我々の理解を超えた行動であった。また、今東光の語る次のようなエピソードもある。

「川端の奇異な行動の一つとして挙げられる秦野章の選挙戦の砌ホテルで按摩を取っている時、突然、起きあがって扉を開け、

『やあ。日蓮様ようこそ』

と挨拶し、それが終るとまたベッドに戻って治療を受けている最中、またしても、

『風呂場で音がします』

と言いながら飛び出して行って、

『おう。三島君。君も応援に来てくれたか』

と話すのを聞いて按摩はぞっと寒気がして膚はだえに粟を生じ早々と逃げ帰ったのを、彼は何でもないように人

人に語っているのを聞いて彼の異常さに驚いたということが僕にも伝えられたが、僕もあの都知事選の最後の日、川端に頼まれて一緒に宣伝車に乗ったので、彼からもここにこと笑いながら、

『日蓮上人が僕の身体を心配してくれてるんだよ。佐藤総理をはじめ自民党の連中は僕の身体を案じて、大変でしょうと慰めてくれるが、これは慰めにもならないよ。それほど心配なら初めから選挙戦みたくないものに引張り出さなきゃ好いじゃないか』

と言った。(「本当の自殺をした男」昭和47・6『文藝春秋』)